

## 第73回福井県小学校長教育研究鯖丹大会 あいさつ

福井県小学校長会長 小林 利幸

鯖丹地区の校長先生方が中心となり開催準備をしてきた「第73回福井県小学校長教育研究鯖丹大会」は、コロナウイルス感染拡大防止のため、やむなく中止の判断をせざるを得ませんでした。昨年度来、運営や会場の準備に尽力していただいた鯖丹地区の皆様、そして何より、提案者として発表準備をしてきた8名の校長先生には大変ご迷惑をおかけしました。8月に会員が集合しての開催ができなかった後も、コロナウイルスの感染状況を睨みながら、誌上発表やオンライン形式での開催の可能性を探ってきました。最終的には、コロナウイルスの感染状況に左右されずに、提言者の発表をもとに意見交換ができる方法として、分科会ごとのオンライン開催とさせていただきました。この決定に際しての会員各位のご理解、ご協力に感謝申し上げます。

鯖丹大会の大会主題は、全国連合小学校長会の研究主題である「自ら未来を拓き ともに生きる豊かな社会を創る 日本人の育成を目指す小学校教育の推進」であり、この研究主題は、価値観の違いや変化を前向きに受け止めながら、自らの力で未来を切り拓き、誰もが幸福と感じられる、ともに生きる豊かな社会を創り出すことのできる人間を育成する教育を実現しなくてはならないという強い思いから設定されています。

副主題は 「夢と希望の実現に向けて主体的・協働的に学び 未来を生き抜く力を育成する学校経営」となっています。この副主題には、子どもたち自身が夢と希望をもち、学ぶことの意味や価値を見だし、未来を切り拓くために努力できるように支援していくという校長としての思いを込めています。

今回の研究大会は、8つの分科会ごとの研究課題に沿って、学校現場で行われた実践をもとに、参加者が意見交換する場となります。現代は、情報化やグローバル化が加速度的に進む中で、未来予測が困難な時代を迎え、さらにはコロナウイルスへの対応という、避けて通れない大きな問題も発生しています。

実践の中には、新しい教育課程構築のために、われわれ校長が果たすべき役割や指導性について多くの示唆が含まれています。我々は、貴重な実践発表から学んだことをもとに、新たな時代に対応した学校教育を探る努力を続けなければいけません。そして、それぞれの学校で、子どもたちの未来のために、教職員とともに楽しい学校づくりに努める責務があります。今回の研究実践が、各校長先生方の学校経営にお役に立つことを祈念しております。

最後になりましたが、今大会の開催に当たり、ご指導とご助言をいただきました関係各位に心から感謝申し上げます。

## 第73回福井県小学校長教育研究鯖丹大会教育長寄稿

福井県教育委員会教育長 豊北 欽一

8月25日に開催予定だった「第73回福井県小学校長教育研究鯖丹大会」が新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止となりましたので、当日申し上げたかった点を寄稿します。

今年4月に、新任校長研修の際、約40頁の資料で講話をさせていただき、昨今の教育的課題をとらえて私が伝えたいことを盛り込みました。皆さんには、県小学校長会事務局を通じて送付していますので、必要に応じて、職員会議等で活用していただければと思います。

また、小学校長の皆様からご提案やご意見が特にあれば、教育長までお寄せ下さい。個々にお返事は書けませんが、必ず読ませていただきます。

(E-mail : k-toyokita-yn@pref.fukui.lg.jp)

小学校については、主体は市町教育委員会ですが、県の教育長としてやりたいことを3点挙げます。

1点目は、工藤勇一氏や平川理恵氏のように、最前線の教育を進めている校長や教育関係者を講師に招いて教員の意識改革を図り、福井の教育に磨きをかけることです。

2点目は、通うのが楽しい学校づくりを進め、子どもに思い出に残る学校生活を送らせること、そして昨今、増加し続けている不登校を減らすことです。校長がリーダーシップを発揮し、教員と一緒に目標を明確にして、素晴らしい学校をつくってほしいと思います。

3点目は、教育現場の声を大事に考え、何か変える時は、市町の教育長と相談や議論をすることです。学校視察をはじめ、外国人児童の多い学校見学や研修会の参加、中高のビブリオバトル、理数グランプリ、全国高校生プレゼン甲子園、英語のディベート大会、SCやSSWの通算10年勤続に対する感謝状贈呈のあとの懇談など、できるだけ現場を意識するように心がけています。ぜひ、わが校の児童生徒の活動や現状を見てほしいということがあれば、訪問したいと思います。

今年度4月から10月までの超過勤務月80時間以上の教職員は、小学校で164人(1か月当たり約23人)です。昨年同時期と比較し、小学校では約8割の減となっています。今年度末にはゼロにするという目標がありますが、校長・教頭に相当のご面倒をおかけしていることと察します。月45時間は難しくても、80時間以下はぜひ達成していただきたいと思います。教職員一人一人の意識改革が欠かせません。教職員の健康を守る、これから教職に就こうとする学生にとっても、ブラックな職場の印象は払拭しなければなりません。

在校時間の長い教職員の特徴として、横浜市の調査では①時間に対する意識が低く、青天井で仕事をしてしまう「完全燃焼タイプ」②自らの仕事ぶりに不安や自信のなさを抱いている「不安憂慮タイプ」③多様な業務を数多くこなしている「何でも屋タイプ」の3タイプが主であり、また、長時間労働の教職員が多い職場の特徴として、「業務が属人化している」「特定のできる人に業務が集中している」「ノウハウが蓄積・共有されていない」「同調圧力が強く、定時退勤できない雰囲気がある」の4つがあると紹介されていました。

今年度に入って80時間以上の教職員がゼロの学校の取組みを調べましたので、紹介します。

- ・教科専科教員による学級担任の空き時間の確保
- ・同学年の横持ちによる担当教科の削減
- ・業務推進日の設定（授業短縮、授業カット）
- ・早朝勤務の制限
- ・会議・研究会等の内容の精選と目標時間設定(1時間以内)
- ・保護者を長期休業中に実施することで、学期末の業務を分散
- ・夏季休業中の日直を管理職が交代で行うことで、教職員が休みやすくする
- ・遅出勤務の活用と時間割編成の工夫
- ・デジタルドリルの活用、今後文科省のメクビットを活用

2年前の人事異動から内示を早めましたが、新体制における業務分担の見直しによる平準化、部活動顧問に対する時間割編成の工夫や遅出勤務(週1日でも)の導入をお願いしたいと思います。

教育総合研究所では「どの世代でもタブレットが文房具のように使える」「教員の意識を変える」という目標を持って、校種や専門学科を超えた研修を行っており、6月の中堅教諭等資質向上研修（東京学芸大学 高橋純准教授）をWebで見せていただきました。准教授は、教育のICT化とは、行きつくところ、「クラウドを用いた活動の共有化、学習の個別最適化」と言っていました。子どもたちがICTに慣れていくスピードは、非常に速いと思います。大切なことは、教師がすべて指導しようとするのではなく、一緒に学んでいこうとすることではないでしょうか。とりあえずやってみることで、見えてくることがあります。失敗を恐れず、子どもたちと一緒にICTの効果的な活用の仕方を探っていただきたいと思います。また、ICTを使いこなすため、若手教職員を中心に中堅教職員や年配の教職員とのチームワークが高まり、授業力向上にも好影響が出ている学校もあると聞いています。

県では、小中学校のICTを活用した授業改善や業務改善を進めるため、10月に「市町教委との教育DX推進会議」を設置しました。タブレットの持ち帰りに係る課題、デジタルドリルの効果、適応指導教室等におけるタブレットを活用した不登校対策など、今後も定期的に開催し、情報の共有を図ってまいります。

今年度の男性教職員の育児休業取得者数は、今後取得予定も含め19名であり、昨年度の2名から大幅に増加しております。育児休業を取得しやすい雰囲気職場内で広がってきており、今年度の育児休業取得率は18.6%です。今年3月、国の次世代育成支援対策推進法に基づく5か年の行動計画、正式には「次世代育成対策推進および女性職員の活躍の推進に関する特定事業主行動計画」と言いますが、その計画を定め、目標の一つに「男性の育児休業取得率の向上」を掲げ、令和7年度末までの30%達成に向け、引き続き取り組んでまいります。

夫婦で教員をしていて、奥さんが今年度出産して産休を取られ、来年度は奥さんが学校現場に戻るのに代わって、旦那さんが1年育児休業を取りたいとの申請もいただいています。代替教員が不足しないよう、県教委としてもしっかり講師の確保等に努めていきたいと思っています。

昨年9月の県議会で、「家庭教育支援条例」が可決されました。

県内市町によっては、地域主導の「家庭教育支援チーム」が立ち上がっているところもあります。

県では、今年度、家庭教育の現状と課題を把握し、必要な取組みを検討していくため、アンケートを実施しました。現在、結果分析中で正式に公表はしていませんが、一部紹介します。

本日の講演テーマにも関係しますが、「親がどうしてくれるとうれしく思うか」との問いに、小中学生ともに「行きたいところへ連れて行ってくれる」が一番多かったのですが、「良かった時、ちゃんとほめてくれる」が小学生で2番目に多く、中学生でも4番目に多い結果でした。また、中学生で2番目に多かったのは「自分がやりたいことを応援してくれる」であり、「何があっても味方でいてくれる」も小学生4番目、中学生3番目に多い結果でした。さらに、親子関係が良好な子どもの方が、「自分が住んでいるまちが好き」「大人になっても福井県に住みたい」と感じている傾向があることがわかりました。

今年6月に、全米女子オープン選手権で、笹生優花選手が優勝しました。笹生選手が13歳の時、父正和氏が厳しい練習を課すことの葛藤から娘に誓約書を書かせました。それは、「厳しく練習するが、親を憎まない。嫌わない。娘としての笑顔を忘れない」というものです。

優勝した笹生選手は「支えてくれた家族が、ずっとそばにいてくれたから」と言い、父正和氏は、号泣したとのことでした。

我が子の才能を伸ばそうと、小さい頃から塾や習い事に通わせる教育熱心な親も少なくありません。しかし、気づかないうちに、「教育虐待」の状態になり、子どもを追い詰めることもあると聞きます。この笹生親子は、子どもの意思を尊重し、上手に乗り越えている例だと思います。

私は、これからの時代には「創造力」が大事だと思っています。そして、創造力を育むために必要なことは、何事も「よく考える」ことが重要です。ノーベル物理学賞を受賞した江崎玲於奈氏は「Think unthinkable」（考えられないことを考えなさい）、アップル社のスティーブ・ジョブズ氏は「Think different」（違ったことを考えなさい）と言っています。

私が教育長になってから、「ふるさと教育フェスタ」や年表コンテスト、ふるさとの魅力プレゼンテーション大会、ふるさと福井CMコンテストを企画しました。ふるさとの良さを知るだけでなく、それをどう伝えるか、論理的思考力、表現力、創造力等を育むことをねらいとしています。

大会やコンテストでの子どもたちの元気なプレゼンテーションやユニークな発想を大いに期待したいと思います。

近年「考える力がない人」が増加していると言われていています。記憶力ばかりを試すような日本の試験制度も要因のひとつでしょう。親も「○○しなさい」「○○はできた」と指示を出し過ぎる、何でも手助けしてしまうことも関係しているかもしれません。また、教員も知識を教え込むことや手をかけることに越したことはないという意識が強く、「考える力」を養ってこなかったかもしれません。

週刊こどもニュースを担当していた池上彰氏は、著書「考える力がつく本」で、

何はともあれ、インプットを増やすことから始めるしかない。そもそも「考える」とは、自分の中にある情報、インプットをもとに、自分なりの結論、アウトプットを導き出す作業であり、質の高いアウトプットをするためには、まずはインプットが不可欠であると述べています。

そして、「自分がいかに物事を知らないか」を自己確認し、ひょっとすると相手も知らないのではないかと、常に自問自答し、伝える相手への想像力を持っていると考えは深まる。また「わかる」とは、自分がこれまで持っているバラバラの知識がひとつの理論の下にまとまったとき。いわば、知識と知識の関係を示す補助線を引くということ、あるいは、頭の中でひとつの絵にまとまったときと言えます。

小学校の現場では、教員の働き方改革をはじめ、タブレットの有効活用、増え続ける通常学級の発達障がい児童や外国人児童への支援など課題が山積していますが、課題について問題点を明らかにしていただき、小学校長会の皆様とこれからも意見交換させていただきたいと思っています。

## 第73回福井県小学校長教育研究鯖丹大会 祝辞

鯖江市長 佐々木 勝久

令和3年度第73回福井県小学校長教育研究鯖丹大会が開催されますことお慶び申し上げます。

皆様方には、長引くコロナ禍においても、感染症対策を図りながら、子どもたちの学びを止めることなく教育活動を進めていただいていることに、敬意を表しますとともに心から感謝申し上げます。子どもたちが、学校生活で学習やスポーツに取り組むことができているのは、校長先生をはじめ現場の先生方が、学びを止めないよう日々、様々な工夫を凝らしていただいているご苦労あってのことであると存じます。

さて、デジタル技術の発展や持続可能な開発目標 SDGs の推進など飛躍的な社会の変化が進む中、教育におきましても、激動の時を迎えております。Society5.0 といわれる超スマート社会が到来する中「技術の進展に応じた教育の革新」が求められるなど、子どもたちが未来の社会を創り出していくために必要な資質・能力を確実に育む学校教育の実現に期待が寄せられています。

市町としても、学校現場からのご意見をいただき、関係機関と十分連携しながら、時代の流れに即した、子どもたちや学校に役立つ事業を展開し、教育環境の改善・充実を図りたいと考えておりますので、皆様方のより一層のご支援・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

終わりに、皆様方のご健勝と福井県小学校長会のますますの充実と発展を祈念いたしまして、お祝いの言葉といたします。